

TAKE FREE

社会医療法人友愛会

FACE

VOL.012 2024.02

社会医療法人友愛会をかたちづくる人々



友愛会の
介護
その現在地

友愛会の 介護 その現在地

財政をコントロールしながら、急速に進行する少子高齢化時代の医療・介護ニーズに対応するため、政府はその制度改革を強力に推し進めようとしている。2024年度は診療報酬、介護報酬、障害福祉サービス等報酬のトリプル改定、さらには医師の働き方改革の新制度も施行されるなど、医療界はかつてない大きな変革と向き合わなければならない。そのような時代にあって、医療制度の中で今後大きな役割を果たすことになるのが、介護だ。1991年の友愛園の開設以来、およそ33年に渡って介護事業を展開してきた友愛会介護の現在地について明らかにすべく、取材した。

友愛会 介護 概念図

友愛会介護の理念

利用者様の尊厳を守り、安全に配慮しながら、利用者様ひとり一人の生活機能の維持・向上を目指し、地域に根ざした総合的なサービスを提供します。ご家族や地域住民、諸関係機関と協力しながら「安心して、健やかに」これまでの暮らしが続けられるよう支援します。

友愛会介護3つの特徴

連携

コミュニ
ケーション

教育

友愛会の介護サービス体制

訪問リハ

訪問看護

訪問介護

通所リハ
(デイケア)

短期入所
(ショートステイ)

入所

居宅介護
支援

友愛会 介護事業部門

豊見城中央病院
リハビリテーション科

友愛会訪問看護
ステーション

ホームヘルパー
ステーション友愛

友愛園

豊見城市地域包括
支援センター友愛/
豊見城中央病院
ケアプランセンター

友愛医療センター・豊見城中央病院・健康管理センター・豊崎クリニックによる医療的サポート

友愛会は医療・介護の提供体制の将来像を見据え、法人内で「医療・介護・予防・住まい・生活支援」が切れ目なく継続的かつ一体的に提供される「地域包括ケアシステム」を構築し、その発展に取り組んでいる。

その中で介護事業部門は、法人内で急性期から回復期

にまで及ぶ幅広く高度な医療機能を担う2病院の存在を活かし、リハビリや介護職員はもちろん、各診療科の専門医や看護師など多職種と連携して、介護ニーズのみならず疾病を抱える高齢者の医療ニーズにも対応している。さらに近隣事業所や行政とネットワークを構築して、友愛会の医療・介

護体制を法人内だけでなく連携する各施設へも開放し、地域医療・介護に貢献することを目指している。

また介護事業部門自身の改革と成長にも非常に意欲的だ。友愛会が目指すべき介護のあり方について職員全員で話し合っ

て制定した「理念」のもと、ご利用者とご家族、そして職員同士の交流を通じた相互理解を第一に、ご利用者やご家族が望む医療・介護サービスを多職種チームでしっかり提供できるよう最大の努力を注いでいる。また県内外で講師を務めるベテラン職員が中心となって若手・新人教育に取り組み、各種資格取得を支援するなど、質の改善と向上に日々取り組んでいる。■

友愛会介護の教育

友愛会介護の主な特徴として、前ページで3つを挙げた。1つ目は、地域高度急性期医療の拠点である友愛医療センターや回復期リハ、在宅医療看護サービス等を展開する豊見城中央病院をはじめとする医療機関とのシームレスな医療・介護「連携」、2つ目は、ご利用者ファーストの介護を実現するため、ご本人とご家族、そして多職種チームメンバーで行われる緊密な「コミュニケーション」、3つ目は、老健・友愛園の開設以来、友愛会介護が熱心に取り組み、多くの成果を挙げてきた「教育」である。

ここでは、医療からのタスクシフトや高齢化の進展によって介護需要が高まることで顕著な人材不足が予想される介護事業において特に重要度が増すであろう人材教育について、友愛会の取り組みを紹介したい。

医療と介護、そして職業人としての素養を育む法人事務局の教育制度、教育への熱意

友愛会介護の人材教育において重要な役割を果たしているのが、友愛園や豊見城中央病院、友愛医療センターなど各施設の事務機能を担う法人事務局である。社会医療法人友愛会では、各医療機関・施設が職種別教育制度を設けるなど独自の人材育成に取り組む一方、法人全体の事務管理機能を担う法人事務局が全職員を対象に開発した様々な教育制度がある。職務歴やスキルレベルに応じて医療の基本や接遇、管理者としての能力等を養う階層別研修、コミュニケーション、問題解決など特定のスキル取得ニーズに応えるステップアップ研修、また医療や病院経営に関するビデオ教育や講演会など、医療・介護分野に加えて職業人として

の素養など幅広い領域で専門的な研修の機会が設けられており、もちろん介護職員も全ての研修制度にアクセスできる。これは法人内に約2,300人の多様な職員を擁し、その育成に取り組んでいる友愛会ならではの強みである。

友愛会介護は、1991年の友愛園開設以来、人材育成を主要命題として掲げ、その充実に取り組んできた。背景として、介護事業には、未経験者や資格未取得者の入職が少ないこと、また従前より友愛会は医師をはじめとする医療従事者の教育を行っており、組織内に人材育成のノウハウと機運が備わっていたことが挙げられ、友愛園が独自に介護職員の育成に取り組むことは、自然な流れであった。

職員のキャリアプランを見据えた独自の教育体制を充実させ、友愛園では93%が介護福祉士資格を取得

法人事務局による教育制度とは別に、友愛会介護には教育班が設置され、リスク班や衛生管理班など目的別に設置された施設内各班との連携のもと、教育体制の整備・運用・管理を行っている。

新入職員や未経験者が友愛会介護に入職すると、おおよ

法人の教育制度と
友愛園を中心とする
独自の取り組みにより、
多くの介護人材を育成。

そ1年間で3回、入職者の習熟度に合わせた研修が教育係によって対面で行われる。内容は法令遵守やマナー、介護に関する基礎知識など、介護施設に勤務する職業人としての素養に始まり、介助や身体拘束など介護職の基本知識と実務を網羅しており、利用者を担当しても一通りの介護を問題なく行えるまで入職者を育成する。

経験者や入職年次の高い職員に対しても、知識や実務の振り返りや新たなスキル取得のために様々な教育機会を提供している。以前は職員が対面で行っていたが、コロナ禍以降はオンライン研修を導入した。科目は多岐に及び内容も豊富だが、職員はパソコンやスマホで都合のいい時間に独自に学習することが可能だ。新型コロナウイルスの5類移行後は、友愛医療センターをはじめとする法人内の他施設から認定看護師などの医療専門職を招いたセミナー等を開催している。

介護職員のキャリアアップにも熱心に取り組んでいる。介護福祉士資格の未取得者のうち、希望者を対象に国家試験対策のための勉強会や実務者研修を無料で行っている。講師は専門学校などで講師を務める職員が担当し、独自に準備した教材を添削したり、月に1、2回の頻度で開く勉強会で説明したりするなど丁寧に指導しており、2024年1月

現在、例えば友愛園の入所・通所リハ事業で介護職に就く職員70名のうち介護福祉士資格取得者は65名、率にして約93パーセントに及んでいる。さらに、介護福祉士資格取得後はケアマネージャー資格の取得などステップアップも積極的に支援している。

人材育成を通じて地域の医療・介護に貢献すると同時に友愛会介護の質も高める

院外での教育活動にも長年に渡って取り組んでいる。友愛園では20年以上に渡って学生の実習受け入れを続けているほか、前述のように専門学校等で講師を務める職員が複数名在籍しており、専門学校など各種教育機関や地域包括支援センターなどで介護福祉士や認知症サポーター養成講座といった地域の介護人材育成にも取り組んでいる。教育をする側に立ち、アウトプットすることを通じて友愛会職員の知識やスキルが向上し、結果として友愛会介護の質を高めるという考えだ。

今後は、既存の教育体制をさらに磨きつつ、オンライン研修の充実と並行して対面での教育機会を充実させ、より多くの介護人材を輩出し、地域の介護ニーズに応えるつもりだ。 ■

教育体制が整った 友愛会で、 ご利用者と楽しみながら 自らを高める日々

多くの専門職が活躍、 教育環境が整った環境で 働きながら自らを高める

友愛園は高齢者が在宅復帰することを目的とした介護老人保健施設（老健）で、隣接する豊見城中央病院と密接に連携した医療・介護を提供し、法人内各施設や県内各教育機関等で活躍する専門性の高いスタッフが多いことが特徴だ。入所サービスには理学療法士を含む6名のリハビリスタッフを配置。またおよそ40名の介護職員の9割以上が介護福祉士の資格を取得している。

「教育体制が整っていることが友愛会への入職の決め手でした」。そう語るのは、2023年3月に入職したばかりの介護福祉士・新垣珠里だ。他業界で長く事務職として働いていたが、祖父や義父が要介護となり施設に入所したことをきっかけに介護の仕事に身近に感じるようになった。そして、自らも介護の知識と技術を身に着けたいという思いが募り、一念発起して仕事を辞め、専門学校に2年間通学。国家資格の介護福祉士を取得し、念願叶って異業種から介護職に転身することになった。

入職後は、法人内の多職種研修に参加したり実際に働き

ながら友愛会が提供するEラーニングシステムで知識を身に付けたりしてスキルアップを図っているという。「スマホで手軽に動画を見ながら学べるのでとても勉強になる」と、その効果を実感している。

「超強化型老健施設」で、 在宅復帰までのプロセスを 高いレベルで学ぶ

友愛園は、ご利用者が自宅で生活を送ることができるよう、リハビリをはじめとする様々なサービスを提供している。実際に、在宅復帰・在宅療養支援等指標が特に高く、退所時指導、リハビリテーションマネジメント、地域貢献活動、充実したリハビリの4つの評価項目の要件を全て満たした「超強化型老健施設」に区分されており、職員は在宅復帰までのプロセスを高いレベルで学ぶことができる。新垣も今後は介護福

友愛園
入所サービス
介護福祉士

新垣珠里

ARAKAKI Juri

祉士として担当を持ってご利用者とより密接に関わり、在宅復帰に向けた目標達成のためのサポートができるようになることを目指している。

友愛園には、3フロアあるうちの1フロア32~34名ほどが入所しており、現在は認知症ケアに重点を置いているフロアで働いている。実際に介護の現場で働いてみて「立ち上がるといった動作がしづらいなど、元々できていたことが年を重ねてできなくなっているご利用者をサポートし、できるようになった瞬間にやりがいを感じる」と話す。耳が遠くなっている方も多く「ゆっくり明るい声で積極的に話す」ことを心がけ、ご利用者との距離を縮めている。

心の触れ合いに感動 ご利用者も自分も、楽しめる介護

入職して間もない頃、食事介助をした方が自分の亡くなっ

た祖母と同じ名前でご近感を感じていたところ、隣のご利用者に「あなたのことを本当の孫と思っているはず。（介助してもらって）嬉しいはずよ」と声を掛けられたときは、思わず涙が出そうになるほど嬉しかったという。ご利用者の言葉にほっこりしたり、笑ったり、感動したり。会話を通じた心の触れ合いも介護職の魅力だと感じている。

さらに、職場の働きやすさも実感しているそうだ。休日は取りやすくノー残業デーを掲げていることもあり定時帰りが基本。「先輩方も引き継ぎや声掛けをしてくれて帰りやすい雰囲気です」とワークライフバランスも取れている。休日は美味しいものを食べたり、身体を休ませたりしてゆったりと過ごしているという。

これから介護職を目指す人へのメッセージを尋ねると「介護職はご利用者のお世話をするのが仕事ですが、ご利用者と一緒に自分も楽しめる魅力ある仕事です」と笑顔で語った。■



友愛園
通所リハビリテーション
介護福祉士

玉城嘉人

TAMASHIRO Yoshito

豊見城中央病院と友愛園の 通所リハが統合。

医療圏最大規模になっても、 友愛会のチームワークはさらに強く

2023年10月より豊見城中央病院と友愛園の通所リハビリが統合された。これまで以上により安心して快適なサービスを提供するため、フロアの改修を行い、広いリハビリスペースを設置。面積、受け入れ人数が沖縄県南部圏域最大規模となった当施設は、地域に根ざした施設としてさらなるサービスの向上に取り組んでいる。

そんなパワーアップした友愛会の通所リハで介護福祉士として業務に励むのは2023年4月に入职したばかりの玉城

嘉人。「職員同士のチームワークが友愛会の強み。みんなで考えや意見を出し合い、助け合いながら仕事ができている」と充実感をにじませる。

入社して仕事を覚えてきた頃に豊見城中央病院と友愛園の通所リハ事業統合があった。とても忙しい時期だったにも関わらず、上司は「仕事覚えた?」と声を掛けてくれたり気に掛けてくれたりして、とても働きやすい職場だと感じたという。「信頼できる上司がいて、親身になって話をきいてくれる」といい、職員同士の信頼関係が仕事のモチベーションにもつながっている。

ご利用者自身の生きる力、 頑張る姿に心を動かされた

介護職歴は9年。高校卒業後に食品加工業者に就職した

医療圏最大規模の通所リハで、
多職種が考えや意見を出し合い、
助け合いながら仕事ができる

が、新しい仕事を探していたときに介護の仕事をしていた母親から「仕事を探している間、私の職場で働いてみたら?」と声を掛けられたことがきっかけで、介護業界に足を踏み入れた。初めは軽い気持ちで始めたというが、色々なご利用者に出会い「自分に合う仕事はこれだ」と確信した。

その中でも印象に残っているエピソードがある。以前、別の介護施設で勤務していたとき、何度か命に関わる病気をしたご利用者がいた。「楽しみにしていた東京オリンピックがコロナで1年延期になったから、それを見るまで負けない」と話し、病気を乗り越えて病院から戻って来たとき、その生きる気力やリハビリを頑張っている姿に心を動かされたという。そして、ご利用者が持つ力を最大限引き出し、その人らしく生活できるようサポートする介護職にやりがいを感じている。

介護職が必要となる時代、たくさんの 人の人生を支える仕事に誇り

友愛園の通所サービスは、理学・作業療法士による心身の機能維持・回復の為のリハビリ訓練をはじめ、医師、看護師、介護福祉士等による健康管理やレクリエーションなどの諸活動を提供しており、また月に1回程度、言語聴覚士による食事の評価なども行っている。趣味的活動では、手工芸や園芸など指先の細かい動作を通じて心身の機能回復を図り「食事をする」「入浴する」「趣味を楽しむ」といった日々の生活に必要な応用的動作の回復を目指したりハビリを通して、その人らしい生活を送ることをサポートする。さらにパワーリハビリといった機械類を使ったトレーニングで体力・活動性の向上につなげている。

玉城は特に認知症の方には不安を与えないような声掛けや、相手の話を否定せず耳を傾けることを心がけているという。そのためコミュニケーションツールとして「方言も取り入れていきたい」と意欲的だ。「介護職は将来もっと必要になると感じますし、たくさんの人の生活を支えていると思うと自信を持って仕事ができる。信頼する上司のようになることが目標です」と真っ直ぐな視線で語った。



病院のサポートの下、 幅広い学びが得られる友愛会の訪問看護は、 若い看護師にも勧めたい

友愛会の訪問看護は、2020年8月の病院移転時から豊見城中央病院内に訪問看護ステーションの拠点を置く一方、糸満市の旧友愛会南部病院の隣りに訪問看護サテライトを構える2拠点体制で展開している。

訪問看護ステーションから専門の看護師等がご利用者のご家庭を訪問。病状や療養生活を看護の専門家の目で見守り、適切な判断に基づいたケアとアドバイスで在宅での療養生活が送れるよう24時間365日対応・支援する。また、医師や関係機関と連携をとり、様々な在宅ケアサービスの使い方を提案している。

ご利用者の「城」に伺い、長い関係を築く そのための関わり方、心のケアを磨く

訪問看護ステーションに配属されて1年ほどの看護師・上江洲安洋は、理学療法士の父の影響で医療関係の仕事に

関心を持ち、県内の看護専門学校を卒業、県外の急性期病院で3年間経験を積んだ後、友愛会に入職。その後1年間、回復期病棟に勤務し、自ら希望して訪問看護に異動してきた。「まだ経験が浅い方なので、とにかく訪問看護師としての経験を積みたい。現場の先輩方のようにご利用者やそのご家族との関わり方やアセスメント力を磨いていきたいです」と前を見据える。

病棟での看護と訪問看護の異なる点は、患者さんとの関係性の深さだと感じている。訪問では1対1でのケアがより必要とされ、数ヶ月から数年にわたって長く関わる患者さん多いという。「病棟は病院のルールのもとに運用され、また患者さんとの関わりも短期間で終わりがちですが、在宅はご利用者のご自宅にこちらが伺う立場。上司からも、相手の城に入ることだからその城のルールに従って、そのなかで長く続く関係性を上手く築かなければならない。ご利用者はもちろん、

ご家族への配慮も大切だ、とアドバイスをいただいた」と話し、心配りを欠かさないう心がける。これまでに受け持ちした方のお看取りも経験してきたが、「特に終末期を迎える患者さんご家族との信頼関係を築くための関わり方や心のケアはもっと学んでいきたい」と目標を掲げる。

必要に応じて 法人2病院のカルテを確認、 医師と連携して対応

日々の業務では病状の観察から医師の指示による医療措置や服薬管理、食事・排せつのお世話、終末期ケアまで幅広い看護的ケアを行い、現場で医師の指示が必要になれば同じ豊見城中央病院内の訪問診療と連携して対応する。

法人内に2つの病院を有する友愛会の強みを活かし「高度急性期の友愛医療センターを受診している方も多いた

め、治療の経緯をカルテですぐ確認できたり、いざ何かあったときに関係する部署と電話1本で調整がスムーズにできたりと、業務を進める上で非常にやりやすい」と実感する。

自らが主体となって多職種と連携し 幅広い学びが得られる友愛会の訪問看護 若い方にも勧めたい

病気や障害を持った人が住み慣れた地域やご家庭でその人らしく療養生活を送れるよう看護ケアを提供する訪問看護。上江洲は「提供したケアでご利用者やご家族の反応が見えたときや、自分が主体となって多職種と連携し、よりよいケアが提供できたときにやりがいを感じる」と語った上で、「幅広い学びが得られる現場ですし、今後は在宅で療養する患者さんが増えていくと思うので、若手の看護師の方々にもぜひ訪問看護に入ってきてもらいたいですね」と話した。 ■



友愛会訪問看護ステーション
看護師

上江洲安洋

UEZU Yasuhiro



**ご訪問の時は笑顔で、
声をワントーン上げて**

ホームヘルプステーション友愛（豊見城中央病院内）の訪問介護員・上原美奈子は「訪問介護の魅力は1対1でケアに携われること。ご利用者はまるでみんな家族みたいです」と笑顔を見せる。訪問介護（ホームヘルプサービス）は、自身やご家族だけで日常生活を営むことが難しくなった要支援・要介護者に対して、介護福祉士やホームヘルパーが自宅に訪問して、心身の特性を踏まえて、その有する能力に応じ、自立した日常生活を営むことが出来るように、入浴・排泄・食事等の介助、掃除・洗濯・調理等の援助、日常生活上のサポートを行っている。

「ご利用者のお宅を訪ねるときは、まず笑顔で声をワントーン上げて」をモットーに、ご利用者とのコミュニケーションを大切にしているといい、相手と目線を合わせながら「調子はどうですか？」などと声をかけながら世間話などの“ゆんたく”を楽しむ。「流れ作業のように介助をするのではなく、コミュニケーションを図ることでご利用者にも受け入れてもらえると感じています」と話す。「上原さんにまた来てほしい」と言ってもらえたときが最高にやりがいを感じる瞬間だという。

**介護事業内はもちろん、
法人2病院との緊密な医療連携体制が
職員、ご利用者とも安心できる友愛会**

ホームヘルプステーション友愛は「介護保険法」や「障



ホームヘルプステーション友愛
介護福祉士

上原美奈子

UEHARA Minako

異変に気付いたときには、
すぐに医療に繋がられる
安心感が、
介護職にも、ご利用者にも



害者総合支援法」に基づき、一定の研修を修了した経験豊富な訪問介護員や介護福祉士が自宅を訪れ、介護サービスを提供。同じ豊見城中央病院内の訪問看護、居宅介護支援事業所、地域包括支援センターとも連携して、様々なサービスを必要とする方々へスムーズに提供できるのが特徴だ。実際にヘルパーが訪問した際にご利用者がいつもと雰囲気が変わったり、調子が悪かったりといった異変に気付いたときには、法人内の事業所と連携している強みを活かしてすぐに看護師等の医療者に連絡を取り、医療に繋がられる体制が整っており「訪問する側にとってもご利用者にとっても安心感がある」と感じている。

**ライフステージに合わせて
柔軟に対応してくれる友愛会だから
子育て世代が活躍できる**

20代で友愛会に入職しヘルパー歴12年目の上原は、子育て真っ最中。仕事と家庭を両立しながら働いており、訪問

ヘルパーを「子育て世代が活躍できる仕事」だという。掃除や洗濯、調理など育児をしながら培った家事スキルを介護の現場でも存分に活かすことができる上に、子どもの学校行事などに合わせてシフト調整もしやすく職場環境にも恵まれていると感じている。まだ子どもが未就学児だった入職当時は、時間を柔軟に調整しながら育児の合間に仕事をするスタイルで登録ヘルパーからスタートし、育児が落ち着いてからは常勤として、長く友愛会に務めることができています。

「これまで仕事の都合で子どもの行事を欠かしたことはないですし、ベテランのヘルパーさんには沖縄料理や煮物料理を教してもらい今ではクープイリチーもお手のものです（笑）。このお仕事や職場に私自身も助けられていると思いますし、ぜひ若い世代の方々にも来てもらいたいです」と話す。

今後は、自分の介護職としての経験や仕事の魅力を学校などで伝えることにも関心があるという。「今自分がやっていることを人に教えられようになりたいですね」と後進の育成への意欲に目を輝かせた。

友愛会の 介護 その現在地

地域包括支援センターは、地域で暮らす高齢のみなさんを、介護・福祉・健康・医療などさまざまな面から総合的に支えるための相談窓口の役割を担う。豊見城中央病院内にある豊見城市地域包括支援センター友愛は、豊見城市から委託を受け、2020年4月に開設された。主に市内西部を管轄し、65歳以上の方やそのご家族であれば、誰でも気軽に相談できる。

認知症地域支援推進員として主に認知症に関する相談を担当している社会福祉士・新里智美は「地域の方々に認知症に対する正しい理解を広げたい」と話す。入社したのは1年半前だが、認知症の知識や対応方法などを伝える「認知症サポーター養成講座」を積極的に地域で催し、10回の開催で150人ほどのサポーターが新たに誕生した。「はじめは1カ所だけの開催でしたが、社会福祉協議会や自治会の方々の協力もあり、他の地域にも広がっていきました。短期間に地域との繋がりもでき、とても有意義でした」。

さらに、認知症の方とその家族、地域の方が集い、認知症について語り合い、相談できる場として「オレンジカフェ美らとみぐすく」を月に1回のペースで開いている。「認知症になっても安心して生活できる地域」を目指し、参加者同士が交流しながら日頃抱えている悩みを自由に共有し合ったり、認知症に関するミニ講話を通して知識を深めたりしている。「とて

もアットホームな雰囲気、情報交換しながらアドバイス合っていて、皆さん家族みたいな感じです。参加者のお話を聞くと私自身も勉強になります。今後、さらに多くの方に参加していただきたいです」と活動の周知にも力を入れる。

もともと高齢者施設で働いていた新里は「より幅広く福祉に関して悩んでいる方々の相談に応えたい」との思いで社会福祉士の資格を取得した。相談業務にやりがいを感じているといい「些細なことでも困ったときに頼ってもらえることはとても嬉しいです」と笑顔を見せる。ご利用者と接する際に心がけていることとして「相手の話を否定せず常に傾聴すること」を挙げ、「最初は支援を受けることに後ろ向きだった方と信頼関係を築くことができ、適切な介護サービスや病院受診につなげられたときはとてもやりがいを感じます」と話す。

「たくさんの方々に認知症について正しく知ってもらうことが1番の目標」とした上で、認知症のご本人が集まる場所の提供や、より若い世代への認知症サポーター養成講座の開催を目指しているという。「認知症の方でも体は元気な方が多くいらっしゃるの、ご本人同士が交流や活動ができる場があればやりがいや生きがいにつながるのではと考えています。あとは、小中学生を対象にサポーター養成講座ができれば小さい頃から地域のおじいちゃんおばあちゃんに関心を持ってもらい、より認知症の方に優しいまちづくりができるのではないかと思います」と活動の広がりにも期待を膨らませた。 ■



豊見城市地域包括支援センター友愛
社会福祉士

新里智美
SHINZATO Tomomi



豊見城中央病院ケアプランセンター
ケアマネジャー

東川平汐里
HIGASHIKAWAHIRA Shiori

居宅介護
支援

「人生の節目(最期)までご本人やご家族の思いに寄り添い、関われることにやりがいを感じています」。日々、ご利用者が在宅での生活を送る上で最適な介護サービスを受けられるよう、ケアプランを作成し本人やそのご家族のサポートに奮闘するケアマネジャー・東川平汐里。ケアマネジャー歴は4年だが、実は友愛会に入職した当初は、作業療法士としてリハビリ職の採用だったという。急性期の患者さんのリハビリを担当する中で、急性期病棟から自宅にそのまま帰る方を多く見てきたが「入院中から在宅での生活や介護に向けて不安を口にする患者さんが少なくなかった」。そんな経験から「在宅介護の知識を持っておけば何か患者さんの役に立てるかもしれない」と考え、リハビリ業務の傍ら仕事終わりにコツコツ独学で勉強し、ケアマネジャーの資格を取得した。

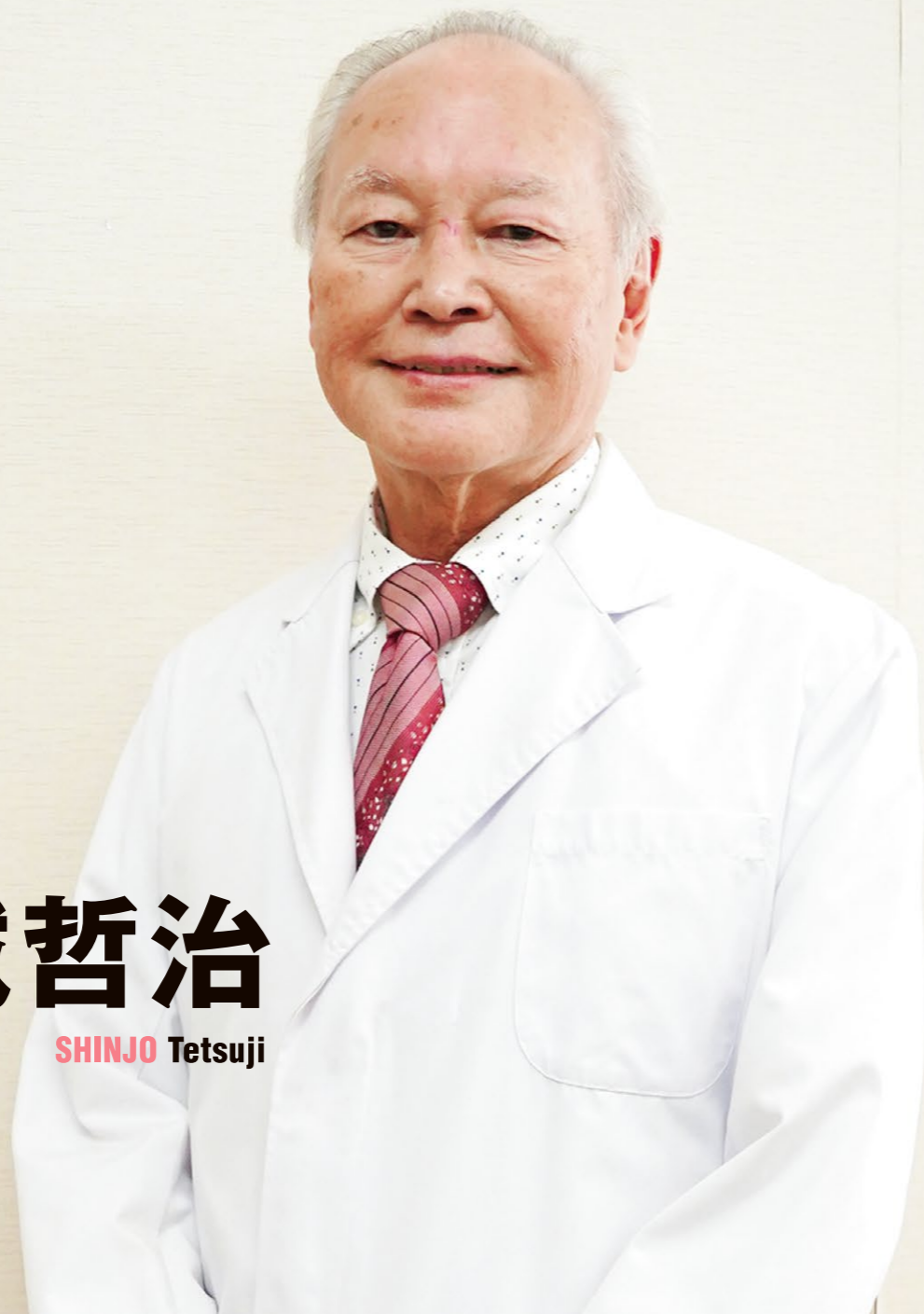
具体的にケアマネの仕事を意識し始めたのはどんなきっかけがあったのか。急性期リハでキャリアを積み、終末期の患者さんとも多く向き合う中で、「在宅でのお看取りを望む本人を含め、ご家族に寄り添ったアプローチがしたい」という思いが強くなり、リハビリ職でカバーできる領域を越えて、患者さんとその家族の「トータルサポート」に携わりたいと考えるようになった。上司に相談したところその思いを受け止めてもらい、ケアマネジャーとして法人内での異動が実現したのだそうだ。「医療ニーズが高い方の介護に関われるのは、病院や老人保健施設友愛園、訪問看護ST等が併設している友愛会ならではの強みだと思います。友愛会だからこそ自分のキャリアアップも

実現でき、とても感謝しています」と話す。

実際に豊見城中央病院ケアプランセンターは、日頃から友愛医療センターや豊見城中央病院の地域連携室、入退院支援室と連携し、医療ニーズの高い方や在宅看取りをお考えの方、独居高齢者の方からの相談を積極的に受け付けている。また、地域の事業所とも連携し、定期的な研修会や事例検討会を実施したり、中重度(要介護3~5)のご利用者を積極的に受け入れたりするなど、より質の高いケアマネジメントを目指しており、特定事業所加算Iの取得を継続している。

現在、東川平は30人ほどのご利用者を担当し、介護保険サービス利用や配食サービス等、在宅での生活全般に関する相談を受けたり、介護サービス事業所や病院等との調整を図ったりして、ご利用者一人ひとりの状況に合わせた支援を行っている。

がんの告知を受け、終末期を自宅で過ごしたいという方や難病を抱えながら治療を終えて在宅に戻られる方などにも関わっている。「難病の方が在宅で過ごすためのケアと一緒に考えたり、お看取りに際して本人の思いをご家族に繋げたり、本人が残した思いがどう終活につながったかを告別式に参列して見届けたりもします。ここまで深く人生の節目に関わらせてもらうのはここでしかできない」と仕事に誇りを感じている。ご利用者との面談では「本人の要望や困りごとを本音で話してもらうために、自分の経験も交えながら気持ちに寄り添ったコミュニケーションを意識しています」と話す。「さらに経験を積んで主任ケアマネジャーの資格も取得したい」と目標を語ってくれた。 ■



友愛園
施設長 医師

新城 哲治

SHINJO Tetsuji

私は京都府立医科大学医学部を卒業後、神戸の病院で内科一般を研修し、卒後3年目に国立循環器病センター心臓内科に入って、そこで3年間研修しました。当時は様々な循環器治療技術が登場し発展しつつあった頃で、心臓カテーテル検査やカテーテルアブレーション、心臓リハビリテーションなど循環器治療の一連をそこで身につけました。その後、豊見城中央病院に入職し、循環器内科医として勤務した後、友愛園の施設長となりました。

友愛園では、医師として利用者の健康管理はもちろんですが、特にポリファーマシー（多剤服用）の改善に取り組んで

います。高血圧や糖尿病の一般的なガイドラインに則って処方を受けると、高齢者は10種類以上の薬を服用することになります。薬は腎臓や肝臓で代謝されますが、ガイドラインは75歳以上の高齢者に関するエビデンスが決して多くはありません。しかしながら腎臓、肝臓の機能が衰えている高齢者への多剤投与による相互作用はとて大きいことが容易に推測されます。実際、6種類以上の薬を使うと入院日数が増える、転倒が増える、認知症が進行するなどの影響が生じ、結果として寿命が短くなるといったデータもあります。友愛園のご利用者のように80歳を超える高齢者では、多剤服用に

高齢時代の急性期と在宅を しっかりつなぐ役割を果たすため、 まずは介護の職場環境の 整備に取り組みたい

よって健康に大きな影響が生じることは明白です。私は内科医としてその改善に取り組むことを命題とし、これまでの自分の知識と経験を活かして、一人ひとりの反応を見ながらポリファーマシーの改善に努めているところです。

友愛会介護の強みとして、まず何より病院との医療介護連携を挙げたいと思います。老健には基本的に医師が一人配置され、友愛園では施設長の私が勤務していますが、一人では対応することが困難な夜間帯や土日でも、隣接する豊見城中央病院の医師がしっかり対応してくれるので、ご利用者はもちろん、職員も安心して過ごすことができます。また高度急性期の友愛医療センターとも医療的サポートはもちろん人材育成でも連携し、介護の質向上を図っています。

今後は、コロナ禍で停滞した地域連携への取り組みを強化したいと考えています。高齢社会の到来によって高齢者救急の増加や在宅での老老介護など様々な現象が起きはじめており、これには社会全体で対応する必要があります。その中で友愛会介護は、急性期医療とご自宅での安心な暮らしを橋渡しする中間機能として、生活期リハや在宅サービスを地域の他施設・機関と連携してしっかり提供することが

求められます。そのような社会的期待に応えるため、介護報酬改定などによって期待される国の政策的サポートを活用しつつ、労働条件の改善や人材育成を通じたキャリアアップを支援するなど、職員が働きやすい、働きがいのある環境の整備に取り組む所存です。

編集後記

友愛会の介護は、友愛会の中でも良い意味で“優等生”。経営的に安定し、職員は真面目で丁寧、そしてエンゲージメントが高いという印象がある。それは豊見城中央病院をはじめとする他施設との緊密な連携や法人によるバックアップだけでなく、職員のキャリア形成を見据えた教育と人材育成に、組織を挙げて取り組んできた成果であると言える。高齢・少子化に伴って医療を取り巻く環境が大きく変化し、介護が果たすべき役割がさらに増す時代にも、友愛会は頼もしい彼らとともに前に進んでいくことだろう。(和田)



社会医療法人 友愛会

〒901-0224 沖縄県豊見城市字与根50番地5
TEL.098-850-3811 FAX.098-850-3810

広報誌フェイス

発行人／比嘉国基

編集／広報誌編集委員会

印刷／光文堂コミュニケーションズ株式会社



友愛会HP



臨床研修医HP